In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	なぜ援助者が批判されるのか：利己的動機を推測する心理機制
Author	山本, 佳祐 / 池上, 知子
Citation	人文研究. 72 巻, p.111-124.
Issue Date	2021-03-31
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	野崎充彦教授 ： 井狩幸男教授 ： 大場茂明 ： 池上知子授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第72巻　2021年３月　111頁～124頁

なぜ援助者が批判されるのか：利己的動機を推測する心理機制

山本佳祐　　池上知子

なぜ人は援助を行った者に対して「偽善者」等と批判を行うのであろうか。先行研究では、第三者の援助者に対する評価は動機推測に基づいて行われること、動機推測は状況要因を手がかりとして規定されることが明らかにされてきた。しかし、動機推測の心的メカニズムについては知見が乏しく十分に解明されていない現状にある。そこで本稿では、援助者に利己的動機を推測する心理機制について以下の仮説を提案した。第１に、第三者は素朴に保持する自己呈示理論に基づいて動機推測を行うことから、援助場面における観察者の存在が利己的動機の推測を促す。第２に、潜行性決定論の観点から、観察者の援助者に対する称賛が利己的動機の推測を促す。第３に、コスト信号理論の観点から、援助に伴うコストの大きさが動機推測に影響を及ぼす。第４に、投影理論の観点から、賞賛獲得欲求の強い第三者ほど、援助者に利己的動機を推測しやすい。最後に、これらの仮説の検証可能性と今後の展望について議論した。

1. はじめに

援助行動は本来社会的に望ましい行為であるが、援助を行った者（援助者）が必ずしも肯定的に評価されるとは限らない。例えば、2016年に熊本地震が起こった際、芸能人のＳが被災地へ寄付を行ったが、「好感度を上げるために利用している」などの非難の声が上がった[1)]。また、2020年に九州・中部地方が豪雨の被害にあった際、芸能人のS.Rが被災地に寄付を行い、一部の人たちから「売名行為だ」などと批判された[2)]。このように援助者を批判する人が実際どのくらいいるのかについてはこれまで調査されておらず、明確にはわからない。今後、調査する必要があろう。もしかしたらごく少数かもしれない。けれども、たとえ少数であっても、援助に直接関与していない立場にいる者（第三者）が援助者を批判することにより、援助者はその後、援助を行うことに躊躇いが生じることが懸念される（高木, 1987; Barr, 2001）。批判を恐れて援助行動が抑制されることになれば、被災地の復興に遅延をもたらすなど、社会にとって大きな問題に発展しかねない。したがって、善意の援助者が、正当に評価されるための解決方略を明らかにすることが望まれる。

この解決方略を解明するためには、なぜ援助者が批判されるのか、そのメカニズムをまず把握する必要がある。そこで本稿では、なぜ社会的に善い行いをしている援助者が他者から批判されるのかという問題について、これまでに得られている知見を整理し、今後の課題を明確化

することを目的としてレビューを行う。具体的にはまず、第2節において、先行研究で提案されてきた対人認知モデルを概観し、一般的に人々はどのような認知過程を経て他者の行為を評価すると考えられているのかについて整理する。第3節では、他者の援助行動を目撃した場合に、第三者が何に基づいて援助者を評価しているのか、その直接的な規定因について整理する。第4節では、援助者が援助を行う動機を第三者がどのようにして推測しているのか、その心的メカニズムについて考察する。最後に、本稿の総括と今後の展望について述べる。

なお、本稿では援助者に対する批判が生起する原因の一つとして、特に動機推測に着目する。冒頭に挙げた芸能人の寄付の事例のように、一部の第三者が非難の声を上げる場合、「売名行為」や「偽善者」などといった内容の発言が多く見受けられる。これらの批判を言葉通りに受け取り解釈するならば、「売名行為」と批判する者は、寄付をした芸能人が知名度を上げることで仕事を増やすないし収入を増やすなどの利己的動機に基づいて行動していると推測し、それに嫌悪感を示していると考えられる。また、Alicke, Gordon, & Rose (2013) によれば、人は態度と行動の非一貫性に基づいて、他者の行為を偽善だと判断することが示されている。この知見を援助行動に置き換えて考えれば、他者を助ける利他的な行動が、自身の評判や金銭的利益等を目的として利己的な動機（態度）に基づいて実行されている場合に、偽善と判断されやすくなると考えられる。以上を踏まえると、援助者を批判する第三者は、援助者が利己的動機に基づいて援助を行ったと推測している可能性が考えられる。もちろん、実際には動機推測以外の様々な要因が批判を引き起こしていることが考えられるが、それについては今後の課題として、本稿では動機推測に焦点を当て検討する。

また、「動機推測が原因となり、批判が生じる」という本研究の想定とは逆に、批判をした後に、動機推測が生じるということもあるかもしれない。例えば、第三者が日々何らかのストレスを抱えており、ストレス発散のために衝動的に援助者を批判した後に、自身の批判行為を正当化する目的で利己的動機を援助者に帰属する可能性もある。その可能性についての検討は今後の課題として、ひとまず本稿では、批判の原因が動機推測にあるという前提のもと、動機推測の規定因について以下で議論することとした。

2. 対人認知における特性推論

第2節では、他者の何らかの行為に対して、人々がどのような認知過程を経て印象形成を行うのかという対人認知モデルについての知見を概観する。ここでは援助行動に限定せず、より広い枠組みでの対人認知モデルをみていく。それを踏まえて、第三者が援助者に対して印象形成を行う際の具体的な心的メカニズムについて考察することが、この節の目的である。

対応推論理論

Jones & Davis（1965）は、原因帰属の理論に基づいて、他者の内的特性を推論する際の認知過程を詳細に記述した対応推論理論（theory of correspondent inference）を提唱した。原因帰属とは、ある行動の原因を何らかの要因に帰する推論過程のことを指す（Heider, 1958 大橋 1978）。Heider によると、行動の原因は、行為者の内的特性か外的な状況要因のいずれかに帰属される。対応推論理論では、ある行動の原因が内的特性に帰属される際、その行為者に帰属される具体的な内的特性は、行動と内的特性の結びつきやすさ（対応性）に依存することを前提とする。この対応性を規定する要因として、外的圧力の有無、非共通効果の数（特別な利益が期待できる可能性）、社会的望ましさが挙げられている。例えば、大学の授業中、パソコンの操作がわからず困っている学生がいた際に、ある者が操作を教えて手伝ってあげたとする。このとき、操作を教えてあげた援助者が、大学教員であり、この行動が行われたのが授業中の出来事であったとすると、教員としての役割を遂行しなければならなかったという外的圧力が働いていたために援助が実行されたと推論されるであろう。この場合には外的要因に帰属されることになる。一方、援助者が大学教員でなく、被援助者と同じ学生であるなら、学生には手伝う義務がないため、人々は援助者が「親切な」内的特性を有していたと推論しやすくなるかもしれない。また、慈善事業に寄付を行った者がいた場合、そのことによって選挙での得票数が増えるとすれば、これは非共通効果が期待できることになり、「寛大な」という内的特性との対応性は低下することになる。また、一般に社会的に望ましい行動は、周囲の評価を気にして単に規範に従っただけの行動であるとみなされやすいため対応性が低く見積もられる。援助行動自体は社会的望ましい行動であるので、「親切な」「思いやりのある」といった内的特性との対応性の評価が割り引かれる可能性が大きいことになる。

ただし、対応推論理論では内的要因か外的要因かの二分法を前提としているものの、実際に人々が行う推論では、外的要因が存在していたとしても、その影響を軽視し、行為者の内的要因に原因を帰属する傾向にあることが知られている（Jones & Harris, 1967）。この傾向は、対応バイアス（correspondence bias）と呼ばれる（Gilbert & Malone, 1995）。

以上にみた理論では個人か状況かの二分法を前提としているが、この前提を立てることには批判もある（唐沢, 2017）。批判の内容としては、行動の原因が内的要因と外的要因のいずれに帰属されるのか明白でない場合があるという問題や、行動の原因が同じであるにもかかわらず、言語表現が異なれば、内的要因と外的要因のいずれに帰属されるかが変化するという問題が挙げられる。例えば、ある人が靴を買った場合、その理由を、「その人がその靴に魅力を感じたから」と記述すれば、個人要因に帰属されることになるが、「その靴が魅力的だったから」と記述すれば、外的要因に帰属されることになる。比較的最近の研究（e.g., Fein, 1996; Reeder, Kumar, Hesson-McInnis, Trafimow, 2002）では、個人か状況かの二分法を脱し、状況を考慮したうえで個人の内的特性を推論するという対人認知モデルが提案されている。以降では、

この新たな対人認知モデルの研究動向について概観していく。

疑惑モデル

状況を勘案したうえで個人の内的特性を推論するという認知過程を想定したモデルとしては、まずFein（1996）が提唱した疑惑モデル（suspicion model）が挙げられる。このモデルでは、人が他者のある行動を見た際に、下心が感じられる場合、そのような疑惑を生じさせる状況を手掛かりに動機推測を行い、行為者の内的特性を推論するという認知過程が想定されている。Fein（1996）の実験の内容は以下の通りである。実験参加者は、別の大学生が授業内で書いたとされるエッセイを読み、その書き手の態度や特性についてどのように推測したかを自由記述で回答を求められた。エッセイは、高校生がスポーツで大学の奨学金を得られるようにする議案に賛成するという内容であった。参加者がエッセイを読む際、大学生がそのエッセイを書いた背景情報として、以下のいずれかが教示された。教示は、「大学生は教師から賛成の立場を指定されていた」という選択なし条件、「大学生は自由に立場を選択できた」という自由選択条件、「大学生は立場を自由に選択できたが、教師が強い賛成の立場を表明しており、このエッセイの内容が授業成績に大きく影響することになっていた」という疑惑条件の計3条件であった。自由記述の内容を分析した結果、選択なし条件や自由選択条件では過半数の参加者が対応推論（「議案に賛成している」というエッセイの内容に合致した態度の推測）を行い対応バイアスがみられたが、疑惑条件では約17%の参加者しか対応推論を行わず対応バイアスが消失する傾向がみられた。そして、疑惑条件のほとんどの参加者は、「大学生は教師に取り入ろうとしていた」等の動機に言及しており、書き手の議案に対する真の態度はわからないと記述していた。つまり、疑惑条件の参加者は、「教師が賛成の立場で、エッセイの内容が授業成績に影響する」という状況に関する情報から、教師に取り入るために議案に賛成するエッセイを書いたという疑いを持っていた。そのため、議案に賛成するエッセイを書いたという行動を「議案に対する態度表明」ではなく、「取り入る」ための行動と意味づけ、エッセイの内容に対応する態度の推論を抑制したと解釈される。

多重推論モデル

Reeder et al.（2002）は、Fein（1996）の疑惑モデルからさらに発展させ、より包括的な対人認知モデルを提案している。Reeder et al.（2002）は、他者の内的特性を推論する際、状況要因を手掛かりとして行為者の動機が推測され、その動機に基づいて内的特性が推論されるという一連の認知過程を想定した多重推論モデル（multiple inference model）を提唱した。Reeder et al.（2002）の実験の内容は以下の通りである。実験参加者は、サッカー選手が相手チームの選手の足を故意に引っ掛けるという場面のシナリオを読み、足を引っ掛けた選手に対する印象を評定した。その際、その場面の状況に関する情報が、条件ごとに異なる内容で教示された。ある条件では、相手選手が挑発したという情報が教示された。もう一方の条件では、

相手選手が強く、その選手がいると勝てそうにないという情報が教示された。実験の結果、参加者は足を引っ掛けた選手に対して、状況に応じて異なる動機を推測していた。相手選手が挑発したという情報が与えられた条件では、報復動機が推測されていた一方で、相手選手が強くて勝てそうにないという情報が与えられた条件では、利己的動機が推測されていた。そして、推測した動機に応じて内的特性の推論にも影響がみられ、報復動機よりも利己的動機が推測された場合の方が、行為者の道徳性が低く評価されることが確認された。

個人か状況かの二分法で推論が行われているとするならば、状況に関する情報が与えられたことで行動の原因が外的要因にあったとみなされ、内的特性の推論は差し控えられるはずである。しかし、上記の結果は、状況に関する情報をもとに行為者の動機を推測し、その動機推測の結果に基づいて積極的に内的特性の推論を行っていることを示唆している。

Reeder et al.（2002）の多重推論モデルと Fein（1996）の疑惑モデルは、状況を手掛かりに行為者の動機を推測し、その動機推測の結果に基づいて内的特性を推論するという認知過程を想定している点で共通する。しかし、Reeder et al.（2002）で扱ったサッカー選手が足を引っ掛けるような加害場面では、疑惑モデルでは解釈できない。なぜなら、疑惑モデルで想定しているのは、誰かに取り入ろうとするような下心に関する動機内容であり、報復しようとする動機や、自分が勝つために危害を加えようとする利己的動機は、下心とは性質の異なる内容となるためである。多重推論モデルでは、様々な種類の動機が想定されており、多重推論モデルの方が多様な場面に応用できる一般性の高い対人認知モデルであるといえる。

以上の知見を踏まえると、なぜ援助者が批判されるのかという本研究のテーマに立ち返ったときに重要なのは、援助者の動機がどのように推測されているのかという問題である可能性が挙げられる。次の節では、実際に援助者に対する評価は動機推測に基づいて規定されているのか、その点に関する研究知見をみていくこととする。

3. 動機推測が援助者に対する評価に及ぼす影響

第 3 節では、動機推測が援助者に対する評価に及ぼす影響について検討した研究知見を紹介する。前節で述べた近年の対人認知モデルでは、他者の内的特性の推論が、動機推測に基づいて行われていることが示唆されている。したがって、援助者に対する評価も、動機推測に基づいて規定される可能性が高い。

実際に、第三者は援助者がどのような動機を持っていたかを重視しており、その動機の内容によって異なる評価を行うことが、これまでの研究で示唆されている（Alicke et al., 2013; Carlson & Zaki, 2018; 針原, 2015; Reeder Vonk, Ronk, Ham, & Lawrence, 2004）。

Reeder et al.（2004）は、多重推論モデルに基づき、援助行動がどのような動機に基づいていると知覚するかによって内的特性の評価が変わることを検証している。実験では、ある女子

学生が教授に手伝いを申し出る場面を提示している。その際、背景情報を操作し、たまたま女子学生が時間が空いていて自発的に申し出たとされる場合（統制条件）、女子学生はアルバイトとして雇用されており教授の補佐を行うよう指示されていた場合（選択なし条件）、女子学生が申請している奨学金の選考委員を教授が務めており、その教授は親切な学生を好むことを知らされていた場合（下心条件）の 3 つの条件が設けられた。すると、選択なし条件に比べて、下心条件では、利己的動機が推測され親切さの評価が低下しやすかった。反対に、下心条件に比べて、選択なし条件では、従順動機が推測され親切さの評価が高くなりやすかった。また、統制条件に比べて、下心条件では、利己的動機が推測され親切さの評価が低下しやすかった。

また、Carlson & Zaki（2018）の実験では、参加者は援助場面（例：ボランティア活動など）のシナリオを読み、そのシナリオに描写された援助者に対する印象を評定した。その際、援助を行った動機について、条件ごとに異なる情報が与えられた。まず物質的利益条件では、金銭的報酬など何らかの物質的な利益を得るために援助を行ったという情報が教示された。社会的利益条件では、他者からの評判を良くするために援助を行ったという情報が教示された。感情的利益条件では、自分が良い気分になるために援助を行ったという情報が教示された。他者指向的利益条件では、困窮している他者を助けるために援助を行ったという情報が教示された。統制条件では、援助行動の描写のみで、動機情報は教示されなかった。加えて、中立的行動条件では、援助行動ではなく、映画鑑賞などの評価的に中立となる行動のシナリオが提示された。なお、Carlson & Zaki（2018）では、動機情報の操作以外にも異なる実験操作を行っているが、本節の文脈から逸れるため、その内容については第 4 節で述べる。

結果として、他者指向的利益条件と比べて、物質的利益条件、社会的利益条件、感情的利益条件の方が、援助者に対する利他性の評価が低かった。特に、物質的利益条件と社会的利益条件は、援助行動を行っていない中立的行動条件よりも、利他性の評価が低くなっていた。ただし、感情的利益条件においては、中立的行動条件よりも、利他性の評価が高かった。

なぜ物質的利益、社会的利益目的で援助を行った場合、映画鑑賞などの中立的な行動よりも利他性の評価が低くなったのかについては、他者の将来の行動を予測する上で、人々は行動自体よりも動機を重視しているためだと解釈されている。利己的動機に基づく援助者は、特定の状況下でのみ利他的な振る舞いを見せるため、社会的なパートナーとして信頼できない可能性がある。それゆえ、中立的行動よりも利他性を低く評価したと考えられる。

一方で、感情的利益目的で援助を行った場合、中立的行動よりも利他性の評価が高かったのは、感情的な動機が道徳的な性格に関する誠実さのシグナルであるように受け取られる（Everett, Pizarro, & Crockett, 2016）ために、評価が割り引かれにくかったと解釈されている。

また、動機情報が与えられなかった統制条件は、他者指向的条件と同程度に利他性を高く評価していた。これは、利己的動機に関する証拠がない限りにおいて、人はデフォルトとして善

行を利他性に基づくものと捉えることを示唆している。

以上から、援助者に対する評価は動機推測により規定されることが示唆される。特に、援助を行う背景に物質的利益や社会的利益を得ようとする動機が知覚されると援助者の利他性の評価が低下することがわかる。ただし、ここに紹介した研究は、援助者の動機に関する情報が直接的に示されている場合が扱われている。しかし、冒頭の事例にあるように、現実の場面では、援助者の真の動機が明白でないことが多く、それでも第三者はそれを推測し批判を行うことがしばしばみられる。したがって、第三者が援助者を批判する心理的背景を明らかにするためには、動機推測がどのような要因によって規定されるのかという観点から検討することが必要であるといえる。

4. 援助者に利己的動機を推測する心的メカニズム

第 4 節では、第三者が援助者に対して利己的動機を推測する心的メカニズムについて考察することを目的とし、種々の研究知見を概観する。ただ、実際のところ、動機推測の心的メカニズムについて直接検討している研究はごく少数であり、十分に解明されていないのが現状である。この問題にあまり焦点が当てられてこなかった理由としては、およそ以下のことが挙げられるだろう。第 1 に、そもそも対人認知モデルの中に動機という概念が持ち込まれたのが、比較的最近であることが挙げられる。第 2 節で述べたように、従来の研究では動機という概念は考慮されず、個人か状況かの二分法という前提の下で対人認知のメカニズムが想定されていた。Fein（1996）や Reeder et al.（2002, 2004）の知見を経て、ようやく動機の概念が対人認知モデルの中に持ち込まれることとなった。第 2 に、従来の研究では、援助行動が援助者と被援助者の二者関係で完結するものとして捉えられていたことが挙げられる。そもそもなぜ援助行動が行われるのかという大きな問題が未解明であった時期において、第三者の観点からの検討は優先度が低く、援助者あるいは被援助者の観点からの検討が優先されていたことは必然であろう。近年になり、この問題についての知見がある程度蓄積され、新たな視点として第三者の観点から検討しようとする気運が高まってきた（e.g., Alicke et al., 2013; Carlson & Zaki, 2018; 針原, 2015）。したがって、ここでは動機推測の規定因を直接検討した研究に限らず、より広い範囲でのレビューを行い、動機推測に影響を及ぼすと予想される要因を理論的に導き出し、今後において検討すべき問題を明確にする。

なお、本稿では、評判獲得のような社会的利益を追求する動機が援助者に帰属される場面に焦点を当てる。Carlson & Zaki（2018）は、援助者の利他性の評価を低める利己的動機として物質的利益の追求と社会的利益の追求を挙げている。ただし、物質的利益を得る目的の場合にも、まず評判を良くしておかなければその目的を達成しにくい。人間社会においては、社会的評判の獲得が一義的に重要であることから、利己的動機の中でも人々が注目しやすいのは社会

的利益を追求する側面であると考えられるためである。

観察者の存在が動機推測に及ぼす影響

評判獲得に関する利己的動機を推測する手掛かりとしては、まず援助場面における観察者の存在[3]という状況要因が考えられる。人々は自身が他者から観察されているとき、自己呈示動機が喚起されやすいことが示されている（Cottrell, Wack, Sekerak, & Rittle, 1968）。Leary & Kowalski（1990）によると、自己呈示は「他者が抱く自分に対する印象をコントロールしようとする過程」と定義されている。そこで本稿では、自己呈示動機を「他者が自己に対して好意的な印象を抱くように働きかけようとする動機」と定義し、評判獲得の目的に基づく利己的動機と位置づけることとした。また、Leary & Kowalski（1990）によれば、自己呈示動機が喚起される程度は、自分が達成したい目標との関連性が高い状況においてより顕著になるとされる。例えば、青年期・成人前期における重要な発達課題として「友人獲得」や「恋人獲得」が挙げられ（Havighurst, 1972 児玉・飯塚訳 1997）、これらの目標を持つと想定される大学生においては、将来的に友人としてかかわりがあると予期される他者や、恋人になりうる可能性のある異性の他者を前にした場合に、自己呈示動機がより強く喚起されると予想される。そして、自己呈示動機がどのようなときに強く喚起されやすいかに関して、人々は自身の経験から素朴に理解していることが考えられる。たとえば、谷口・大坊（2005）では、調査参加者に親しい異性を一人想起させ、その異性と会う際に、自己呈示の意識をどの程度抱くか回答を求めている。その結果、参加者はその異性との関係が重要であると認識しているほど、自己呈示を意識しやすいという相関関係が見出されている。自己報告式の質問紙調査の形式が取られていたことから、この知見は自己呈示動機が喚起されやすい状況を人々が素朴に理解していることを示唆していると捉えられる。このように自己呈示動機がどのような場面で喚起されやすいのかに関する理論を人々が素朴に理解しているならば、第三者はその素朴理論に基づいて動機推測を行っているという仮説が立てられる。この仮説が妥当であるなら、援助場面に居合わせた観察者の存在が動機推測にもたらす影響として以下の予測が立てられる。第1に、観察者がいない状況よりも、観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しやすい。第2に、援助者にとって将来的に関係が持続しないことが予期される観察者がいる状況よりも、関係が持続することが予期される観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しやすい。

加えて、第3に、援助者と同性の観察者がいる状況よりも、異性の観察者がいる状況の方が、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しやすいという予測も立てられる。「友人獲得」目標を持つことは、良好な人間関係を築こうとする態度と捉えられ、個人の利益だけにとどまらず、社会にとっても望ましい。一方で、「恋人獲得」目標は、基本的には個人の利益を追求している内容と捉えられる。そのため、後者の目標を想起しやすい異性観察者がいる状況の方

が、利己的にみられやすい可能性がある。事実、Kawamura & Kusumi（2017）の研究では、援助者が同性を助ける場合よりも、異性を助ける場合の方が、援助者に利己的動機が推測されやすいことが示されている。ただし、この実験で示されたのは援助者と被援助者の関係性を規定する性別の効果のみであった。観察者の性別についても同様の結果が得られるか今後検討が必要である。

観察者の称賛が動機推測に及ぼす影響

観察者の存在は、援助行動が実行される以前に存在する状況要因であるが、援助行動が実行された後の観察者の反応も動機推測に影響を及ぼす可能性が示唆されている（e.g., Carlson & Zaki, 2018）。本来であれば、援助行動を行う際の動機は援助を実行する前の段階で定まっているはずである。それにもかかわらず、なぜ事後的な状況が動機推測に影響を及ぼすのであろうか。この項では、この現象が起こる心的メカニズムについて議論する。

Carlson & Zaki（2018）によれば、援助者が援助後に何らかの利益を得ている場合、第三者は援助者に対して利他性を低く評価しやすいことが明らかにされている。Carlson & Zaki（2018）の実験では、第 3 節で述べた動機情報の操作以外にも、援助の結果として援助者が利益を得ているかどうかの情報も操作されていた。先と同様に利益の種類には、物質的利益（金銭を受け取るなど）条件、社会的利益（他者から称賛されるなど）条件、感情的利益（自分がよい気分になるなど）条件、他者指向的利益（他者の困窮状態が改善されたという他者にとっての利益情報のみが教示される）条件が設けられていた。結果として、物質的利益条件や社会的利益条件は、他者指向的利益条件よりも、援助者の利他性の評価が低かった。ただし、感情的利益条件は、他者指向的利益条件との間に差はなく、同程度の利他的な評価となっていた。援助行動を行った結果として快感情が喚起されることは、純粋な利他主義と一致した心理傾向であること（Barasch, Levine, Berman, & Small, 2014）から、感情的利益の場合には、他者指向的利益条件と差が見られなかったと解釈されている。

Carlson & Zaki（2018）は、人々は援助者が利益を得ていない場合に真の利他的行為とみなすという素朴理論を保持しており、そのために、援助者が利益を得ていると利他性の評価が割り引かれると解釈している。上記の結果において、感情的利益の場合は利他性が割り引かれていないが、物質的利益や社会的利益の場合には利他性が割り引かれていることから、彼らが立てた仮説が妥当であったことを示唆している。

しかし、人々がなぜそのような素朴理論を保持するに至ったのか、その背景については明確でない。この背景を説明できなければ、Carlson & Zaki（2018）の仮説が本当に妥当であるかについて議論の余地が残される。実際、 援助者の意図とは関係なく、偶発的に利益が発生した場合には、 第三者が援助者に対して利他性の評価を割り引く必然性がない。それにもかかわらず、利他性の評価が割り引かれるのには何らかの理由があるはずである。

本稿では、その心的メカニズムとして、潜行性決定論（creeping determinism）の観点から解釈を試みる。潜行性決定論とは、ある出来事の結末を知っている知覚者が、結末を知らない他者の判断を推測する際に、他者がその結末を予期できると過剰に見積もる現象である（Fischhoff, 1975）。例えば、援助を行った後、援助者がそこに居合わせた観察者から称賛されたという結末（事後的な状況）を目撃した第三者は、潜行性決定論によるバイアスが生じ、援助者が初めから称賛が起こることを予期していたと過剰に見積もりやすくなる。その結果、評判獲得目的（利己的動機）で援助を行ったと推論しやすくなると解釈できる。援助者の意図とは関係なく、利益が偶発的に発生した可能性は残されていたとしても、結果として利益を得たという事後的な状況を第三者が目撃している場合、潜行性決定論の認知バイアスが生じてしまう。そのため、援助者が利益を得ていない場合に真の利他的行為とみなすという素朴理論を保持するに至ったと解釈される。この潜行性決定論に基づく解釈が妥当であるかについては、今後厳密に検証していくことが望まれる。

援助コストが動機推測に及ぼす影響

観察者の存在や称賛は援助場面の状況に関する要因であるが、このほかにも、その援助行動がどのような内容であるかといった行動自体の要因によっても、動機推測は規定されると考えられる。本稿では、援助に伴うコストの大きさが動機推測にもたらす影響について、先行研究の知見を踏まえて具体的な仮説を導出する。

援助行動は一般に援助者側に何らかのコスト（労力、金銭、時間、危険など）が伴う（高木, 1982）。援助コストの大きさが動機推測に影響することは、コスト信号理論（costly signaling theory）の観点から仮説が立てられる。コスト信号理論によれば、自己犠牲を伴う行動を取ることによって、行為者個人の利他的な資質が他者に伝達される（Zahavi & Zahavi, 1997 大貫訳 2001; Iredale, Van Vugt, & Dunbar, 2008; Van Vugt & Iredale, 2013）。この理論を素直に踏まえれば、大きなコストを伴う援助行動を行った場合の方が、小さなコストを伴う援助行動を行った場合よりも、第三者は援助者に対して自己呈示動機を推測しにくいと予測される。

一方、このような単純な予測ではなく、むしろ逆の傾向がみられる可能性も考えられる。Iredale et al.（2008）や Van Vugt & Iredale（2013）によれば、人は、特に男性は異性を前にした場合に寄付の増額などの利他的行動が促進されることが示されている。この現象が生起するには、自己犠牲を払うことで利他性という資質を他者にアピールできることを、人々が自身の経験から素朴に理解していたという前提が必要である。なぜなら、自己犠牲を払うことで利他的な評判を獲得できることを素朴に理解していないとするならば、異性を前にしたときにより多くの寄付を行う理由がなく、観察者の性別の違いで寄付額に差がみられないと予想されるためである。しかしながら、もし第三者が援助者に対して動機推測を行う際に、素朴に保持しているコスト信号理論に基づいて推論を行うならば、援助コストが小さい場合よりも、援助コ

ストが大きい場合に、利他性のアピールのためにあえて大きなコストを支払ったと解釈し、かえって自己呈示動機を推測しやすくなると予測される。ただし、人々がコスト信号理論の意味するところを素朴に理解していることを前提としても、動機推測を行う際にその素朴理論に基づくかどうかについては自明ではない。そのため、コスト信号理論の意味を素直に踏まえた場合の予測が支持されるのか、素朴に保持するコスト信号理論に基づいて懐疑的な推測を行うという予測が支持されるのか検証することが望まれる。

賞賛獲得欲求が動機推測に及ぼす影響

ここまで状況要因（例：観察者の存在）や行動要因（例：援助コスト）に注目してきたが、動機推測には個人差が存在することも考えられる。本稿では、この個人差がどのようなパーソナリティ特性に基づくのかという問題について、投影理論の観点から仮説の導出を試みる。

投影理論によれば、人は他者の心的状態について推論するとき、自己の心的状態を手がかりとして利用する（Van Boven & Loewenstein, 2003）。この投影理論に基づけば、援助者に対して自己呈示動機を推測しやすい人は、自分自身が自己呈示の動機づけが高いという特徴を持つ可能性が考えられる。自己呈示の動機づけの高さと関連する具体的なパーソナリティ特性としては、賞賛獲得欲求が挙げられる。賞賛獲得欲求とは、他者からの肯定的な評価を得ようとする欲求である（小島・太田・菅原, 2003）。したがって、賞賛獲得欲求の強い第三者ほど日頃より自己呈示への動機づけが高い状態にあるため、自身の心的状態を援助者に投影することを通して、援助者に自己呈示動機を推測しやすいと予測される。この予測について今後、実証的に検討することが望まれる。

5. 結語

本稿は、第三者が援助者に利己的動機を推測する心的メカニズムについて、理論的に導かれる具体的な仮説の提案を試みた。先行研究ではそもそも、なぜ援助者が批判されるのかその心的メカニズムが十分に明らかにされていなかった。そこで本稿では、自己呈示動機の推測に焦点を当て、その規定因として、観察者の存在および称賛、援助コスト、第三者の賞賛獲得欲求といった具体的な要因を挙げてそれぞれの仮説を導出した。このように検討課題を明確にした点に本稿の意義がある。今後においては、これらの課題が実証的に検討されることが望まれる。

ただし、上述した動機推測が規定されるメカニズムを明らかにするだけでは、冒頭に述べた善意の援助者が批判的にみられないための解決方略を見出すという本稿の最終的な目的を達成することは困難である。例えば、観察者がいる状況では利己的動機が推測されやすいという仮説通りの結果が得られたとして、それを踏まえて、援助者が批判をされないために、観察者がいる場合には援助を控えようという提言は社会にとって有益でない。他者が困窮状態に陥って

いるなら観察者の有無にかかわらず、援助を行うことが望ましいためである。援助が実行された中で批判が生じにくくなるための解決方略を、本稿で議論した要因とは別の観点から検討することが必要であろう。

【注】

1）NEWS ポストセブン　2016 年 4 月 28 日
https://www.news-postseven.com/archives/20160428_407820.html?DETAIL（最終閲覧日 2020 年 10 月 21 日）

2）livedoor ニュース　2020 年 7 月 15 日
https://news.livedoor.com/article/detail/18577266/（最終閲覧日 2020 年 10 月 14 日）

3）観察者は、第三者と同義であり、援助行動に直接関与しない立場にいる者を指している。ただし、本稿では、援助場面を見ている主体としての第三者と援助場面の背景の一部となる客体としての第三者（観察者）を便宜上区別する必要があり、これらの呼称を用いた。

【引用文献】

Alicke, M., Gordon, E., & Rose, D.（2013）. Hypocrisy: What counts? *Philosophical Psychology*, 26, 673-701.

Barasch, A., Levine, E. E., Berman, J. Z., & Small, D. A.（2014）. Selfish or selfless? On the signal value of emotion in altruistic behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 107, 393-413.

Barr, A.（2001）. Social dilemmas and shame-based sanctions: Experimental results from rural Zimbabwe. CSAE Working Paper Series 2001-11, Centre for the Study of African Economies, University of Oxford.

Carlson, R. W., & Zaki, J.（2018）. Good deeds gone bad: Lay theories of altruism and selfishness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 75, 36-40.

Cottrell, N. B., Wack, D. L., Sekerak, G. J., & Rittle, R. H.（1968）. Social facilitation of dominant responses by the presence of an audience and the mere presence of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 245-250.

Everett, J. A. C., Pizarro, D. A., & Crockett, M. J.（2016）. Inference of trustworthiness from intuitive moral judgments. *Journal of Experimental Psychology: General*, 145, 772-787.

Fein, S.（1996）. Effects of suspicion on attributional thinking and the correspondence bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1164-1184.

Fischhoff, B.（1975）. Hindsight is not equal to foresight: The effect of outcome knowledge on judgment under uncertainty. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 1, 288-299.

Gilbert, D. T., & Malone, P. S.（1995）. The correspondence bias. *Psychological Bulletin*, 117, 21-38.

針原素子（2015）. 向社会的行動が「偽善」と判断される時―推測された動機が及ぼす影響― 日本心理学会第 79 回大会発表論文集, 284.

Havighurst, R. J.（1972）. *Developmental tasks and education*. 3rd ed. New York: David Mckay Company Inc.（児玉憲典・飯塚裕子（訳）（1997）. ハヴィガーストの発達課題と教育: 生涯発達と人間形成 川島書店）

Heider, F.（1958）. *The psychology of interpersonal relations*. New York: Wiley.（大橋正夫（訳）（1978）. 対人関係の心理学 誠信書房）

Iredale, W., Van Vugt, M., & Dunbar, R.（2008）. Showing off in humans: Male generosity as a mating signal. *Evolutionary Psychology*, 6, 386-392.

Jones, E. E., & Davis, K. E. (1965). From acts to dispositions the attribution process in person perception. *Advances in Experimental Social Psychology*, 2, 219-266.

Jones, E. E., & Harris, V. A. (1967). The attribution of attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 3, 1-24.

唐沢かおり (2017). なぜ心を読みすぎるのか みきわめと対人関係の心理学　東京大学出版会

Kawamura, Y., & Kusumi, T. (2017). Selfishness is attributed to men who help young women: Signaling function of male altruism. *Letters on Evolutionary Behavioral Science*, 8, 45-48.

小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.

Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1990). Impression management: A literature review and two-component model. *Psychological Bulletin*, 107, 34-47.

Reeder, G. D., Kumar, S., Hesson-McInnis, M. S., & Trafimow, D. (2002). Inferences about the morality of an aggressor: The role of perceived motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 789-803.

Reeder, G. D., Vonk, R., Ronk, M. J., Ham, J., & Lawrence, M. (2004). Dispositional attribution: Multiple inferences about motive-related traits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 86, 530-544.

高木　修 (1982). 順社会的行動のクラスターと行動特性　年報社会心理学, 23, 137-156.

高木　修 (1987). 非援助動機の構造とそれに基づく非援助行動の特徴づけ　関西大学社会学部紀要, 19, 27-49.

谷口淳一・大坊郁夫 (2005). 異性との親密な関係における自己呈示動機の検討 実験社会心理学研究, 45, 13-24.

Van Boven, L., & Loewenstein, G. (2003). Social projection of transient drive states. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 1159-1168.

Van Vugt, M., & Iredale, W. (2013). Men behaving nicely: Public goods as peacock tails. *British Journal of Psychology*, 104, 3-13.

Zahavi, A., & Zahavi, A. (1997). *The handicap principle: A missing piece of Darwin's puzzle*. Oxford: Oxford University Press. (大貫昌子 (訳) (2001). 生物進化とハンディキャップ原理: 性選択と利他行動の謎を解く 白揚社)

Why people view helpers in a critical manner?: Psychological mechanisms whereby the inference of selfish motives is promoted

YAMAMOTO Keisuke & IKEGAMI Tomoko

Previous studies have indicated that critical evaluation of helpers is based on selfish motive inference, and that motive inference in turn is influenced by situational factors. However, it remains unclear when and how selfish motives are attributed to a helper, due to general lack of knowledge on this topic. In this paper, therefore, we proposed theoretical hypotheses for psychological mechanisms whereby the inference of selfish motives for a helper is promoted. Specifically, the following four hypotheses were derived: First, based on the naive theory of self-presentation, the presence of observers in the helping scene prompts the inference of selfish motives. Second, from the perspective of creeping determinism, the praise by the observer causes inference of selfish motives. Third, from the perspective of costly signaling theory, the amount of costs associated with helping behaviors influences motive inference. Fourth, from the perspective of projection theory, people with a stronger praise seeking need is more likely to infer selfish motives on the part of the helper. Finally, we discuss the verifiability and future perspective of the above hypotheses.